

## 江戸庶民の旅と江東①

## 伊勢参り

江東区深川江戸資料館

五街道を始めとする道路や、河川・海岸線の河岸・湊などの交通体系が整備された江戸時代、江戸庶民は旅を楽しみました。それは著名な寺社参詣を背景にしたものでしたが、最高の行楽でもありました。江戸以来普及してきた、いくつかの代表的な旅を、江東地域との関わりを踏まえてご紹介しましょう。

## 1. 伊勢神宮

伊勢神宮(三重県)は天照大御神を祀る皇大神宮と豊受大神宮とからなり、前者を内宮、後者を外宮と呼んでいます。現在「神宮」が正式名称ですが、一般には伊勢神宮や親しみを込めて「お伊勢さま」などと呼ばれています。

神社の創建は、3世紀から6世紀の頃と考えられ、5世紀の雄略天皇の頃には、それまで簡素だった神社に神殿が造営され、7世紀の天武・持統天皇の頃から神殿を造り替えて、改めて神を清浄な場所に迎えるという、「式年遷宮」が行なわれるようになりました。平安時代末には熊野信仰などの京都周辺や畿内の寺社参詣が貴族の間でも流行し、伊勢神宮へも参詣がさかんになりました。

また神社に作物を献納する土地、御厨は全国に及び、関東でも葛西御厨などがありました。戦国の頃には疲弊し、遷宮もできない時代もありましたが、江戸時代になって、全国的な規模で民衆を含む広範な信仰を集めました。

## 2. 信仰の普及～御師の活躍～

こうした伊勢信仰が全国に波及するようになった要因として、御師の存在があります。御師は神職ですが祈祷の仲介や修験者との交渉の中で次第に信仰を広め、信者(檀那という)を獲得する活動を行なうようになりました。大麻と呼ばれるお札や伊勢暦を檀那に届け、喜捨(寄付)を得るというもので、檀那の数が多い御師ほど裕福な生活ができました。

彼らは神社の内宮・外宮にいて、伊勢講などで参詣しようとする檀那のために旅の手配をし、伊勢にやってきた檀那を迎え、わが家に宿泊させてもてなしていまし



『伊勢参宮名所図会』内宮宮中図 寛政9年(1797) 三重県立博物館所蔵 内宮の正殿周辺。

た。

神楽の披露もこの御師の屋敷で行われました。檀那たちは袴を着るなどして同席し、間近で御師を中心に展開する神楽を始めとする神事を見物することができました。

まさに神々しく荘厳に満ちた空間を長旅の末に味わうことができたのです。

## 3. 伊勢参りの流行

伊勢参りとは、伊勢神宮への参詣を指しますが、江戸の人にとってそれがあこがれであり、一生に一度の大冒険でした。江戸からは片道だけで約15日間かかる大旅行です。

こうした庶民による「お伊勢参り」の流行は、いつごろから始まったのでしょうか。古くは『大神宮諸雑事記』(『古事類苑』神祇部三所収)によれば、承平4年(934)9月の祭礼で親王が参詣をしたところ、雷鳴がとどろき大雨が降ったといえます。その際の参詣人は10万人ほどとされ、「貴賤を論ぜず」として、貴族から庶民までが加わっていたことが知られます。すでに平安時代から伊勢神宮への参詣は広く行われていました。

江戸時代の伊勢参りについて、江戸の歴史を年表としてまとめた『武江年表』(斎藤月岑著 前篇 嘉永2年・1849 後篇 明治11年・1878)から記事を拾ってみると、表のようになります。

## 『武江年表』伊勢参り記事

年代	記述
寛永 15 年 (1638)	夏より来年二、三月頃に至るまで遠近の男女、伊勢宗廟へ詣づる事夥し(近ごろいはゆるおかげ参りなり)。
慶安 3 年 (1650)	男女、伊勢宗廟へ参詣する事行はる(今云ふおかげ参りなり)。
寛文元年 (1661)	二月より伊勢宗廟へ男女参詣する事夥し。
宝永 2 年 (1705)	今年伊勢宗廟諸国より参詣多し(俗におかげ参りといふ。…(中略)…閏四月上旬の頃、洛中洛外童男童女七、八歳より十四、五歳に至り、貧富を論ぜず抜け参りをいたす事夥し。…(中略)…妻子従僕其の主にとまを乞はず、家を出でて参詣す。伊勢街道は往還莫大にして錐をたつべき地もなし。凡そ参詣の男女、一日に二、三万より四、五万人、或ひは六、七万人と云へり。
享保 3 年 (1718)	春より伊勢参宮はやり出して、諸国より群参する事夥し
明和 8 年 (1771)	3月初旬より、伊勢参宮流行(所謂おかげ参り也。畿内近国を始めとし、次第に諸国に移りて、五月上旬一日に二十四、五万人に及ぶといへり。
文政 13 年 (1830)	春の頃より始まりけん、伊勢大神宮おかげ参り流行し、次第に諸国におよぼし、江戸よりも参詣する者夥し(阿州の者参り始めしより四国一円になり、又京大坂に移り夫より諸国に及ぼせしとぞ。宝永の件にいへる如く、道中施行の宿施行渡し有り、馬駕は美麗に飾りて、参詣の輩をのせ価を受けず、酒飯菓子等を餐し、金銭手拭其の余道中要用品を与ふ。貧賤の者といへども、参宮の者へは礼を厚くしてこれをもてなす。宿々の繁昌言語の及ぶ所にあらずとなむ。十月の頃にして此のこと止む。

まず、表中で目立つのが「おかげ参り」という言葉です。これはお伊勢さまを信仰したので、病気が治った、商売で大きな収入を得たなどのお礼のための参詣といった意味で、お伊勢さまの「お蔭」に対するお礼を意味していました。やがてこうした参詣に参加することで、幸運を得た人々の御利益にあずかるという気運が人々に高まり、参加者が膨大な数に膨れ上がりました。こうしたお蔭参りが爆発的に流行した年として『武江年表』には7回記載されています。

人々は十分な旅支度をしなくても、この時ばかりは熱に浮かされたように群衆の中に加わり、伊勢を目指しました。沿道では炊き出しをしたり、食べ物や草鞋、さらには泊る場所まで提供する人もいるという、全国を巻き込む一大行事となりました。ことに文政13年(1830)の記事では参詣の群衆が厚くもてなされたことが記されています。

また宝永2年(1705)の項には、「抜け参り」とい



『伊勢参宮名所図会』神楽 寛政9年(1797)  
三重県立博物館蔵 御師の屋敷での神楽。絵右下の裃の人々が伊勢参りに訪れた檀那。町に開設されたのもこうした事情によっています。

う言葉があります。これは奉公人やこどもが店の主人や親に黙って参詣することです。親の方でも子が抜け参りをしそうなら着物や携行品を用意し、道中の無事を祈ったのだそうです。わが子が旅を通じて成長することを願ったのでした。

お蔭参りの際には、華美な風俗が目立ち、幕府が介入するまでになりました。法令集『正宝事録』には伊勢参りや大山参り(神奈川県)で、馬の上に蒲団を敷物の代わりに重ね、また贅沢な衣装で出かける者が目立つので、絹紬の毛氈以外は敷物として使わないようにとの触れが出ています(同書第5号文書 慶安元年・1648)。

## 4. 牧野家文書の道中記

江東区亀戸9丁目の旧家、牧野家に伝来されてきた「牧野家文書」には、「道中記」が残されています。もとは4冊ありましたが現在は「巻番」と記された1冊だけとなっています。

この史料の表書によれば、この旅は牧野氏が文化6年(1809)3月6日から7月28日までの約140日間もの長旅で、おもなコースは伊勢参宮・京・大坂・奈良・西国巡礼・熊野路・讃岐・安芸・周防・信州善光寺と、伊勢神宮にとどまらず四国や本州西端にまで及び、さらに帰路は善光寺も訪れるという、まさに大旅行でした。出かけたのは当主の牧野勘四郎英長(56歳)、妻き代(52歳)、供の重蔵の3人です。

3月6日に江戸を立って神奈川・大磯・小田原・三島・由井・鞠子・嶋田・掛川・秋葉山・浜松・赤坂・鳴海・桑名・上野・松坂の各宿に泊まり、3月23日伊勢に到着して4月2日まで滞在しています。この間御師の丸岡宗太夫の世話になりながら二見浦を見物したり、太々神楽の席に出席するなど伊勢逗留を満喫しています。このあと牧野家一行は熊野方面に向かいますが、この巻は熊野神社付近で終わっています。区内に伝来されてきた貴重な「道中記」です。